

論文

近世移行期における浅間根腰三宿の移動

—あわせて3D地図の有用性を検証する—

その一 軽井沢宿

その二 沓掛宿・追分宿

江  
川  
良  
武

## 論文

## 近世移行期における浅間根腰三宿の移動 その一 軽井沢宿

—あわせて3D地図の有用性を検証する—

江 川 良 武

## はじめに

軽井沢地方は信濃と東国＝関東との境界である。境界一般は、古代中世はもとより近世に至るまで、人間社会に対する自然や、俗に対する聖の卓越があったところとされるが、俗の世界に限っても、相対的に「無主」、「権力の空白地域」であった。近世移行期においては、村上、武田、織田、北条、徳川などの争奪の地であったが、この地域に軍団が一定期間駐留できる城塞は存在しなかった。西方の佐久市や小諸市に至ってはじめて本格的な戦闘に備えた大井城、岩村田城、平原城などが出現し、東方は安中市に至って同様の松井田城が現れるのであって、軽井沢地方に存在したのは、防備力の弱い砦や最低限の防備施設を備えた居館、おそらくは「百姓持タル城」の類のみであり、到底、

本格的な戦闘に耐えることの出来るものではなかった。軽井沢地方の地理的周縁性と人口希薄性、そして冬季に限ったことであるが厳寒の地であってみれば、これは避けがたい事であり、したがって前述の各政治権力が、自らの版図と宣したところで、わずかでも敵軍が侵入すれば直ちに状況が一転する不安定な土地であった。それぞれの政治勢力が、浅間山麓にありながらもそこだけに人の住む根腰の三宿に期待したことは、通信交通手段の優位性の確保の「線の確保」であり、それが軽井沢地方に対する軍事目標だったろう。おのずから宿の立地もそれに合わせたに違いない。軽井沢宿の本陣、佐藤家には互いに敵対する武田、北条、村上陣営からの感状などの文書が残されているが、各陣営ともかつて敵方に忠誠を誓っていたなどは不問に付して通信運輸を優先課題としその専門集団の温存に務めたこと

を示すものであろう。しかし近世の到来をもって、こうした緊張は薄まり立地の制限もゆるやかになったはずである。

根腰の三宿のいずれもが洪水や火災などの災害によって、時代とともに場所が移動したとの伝承がある。しかしそれらを記録した一次資料が存在するわけではないから、事実か否かを含めて判然としないことが多い。また移動が事実であっても、災害という「外力」だけで説明し、中世から近世などの時代変化と無縁と見て良いのか疑問が残る。

一方、二一世紀に入った頃からレーザー探査技術と画像技術を駆使した3D地図と呼ばれる新しいツールが主に防災分野で活用され始めた。これは古道、条里制、城館などの研究分野で、かつて航空写真が果たしたような画期を歴史地理学にもたらす可能性がある。そこで本稿では3D地図を援用しながら各宿場の「移動」の実在性を検討し、それが事実であれば移動の背景を検討する。紙数の関係から本論文では軽井沢宿を取り上げ、次稿で沓掛宿と追分宿を論ずる。

## 一 軽井沢と中村

軽井沢の旧家・土屋氏が明治二八年に建立した軽井沢霊園の墓碑に、家歴を記した次の一文がある。「嫡孫自縫左右衛門重直累代此地居住。古昔此地中村云。後軽井沢號」

とあり、土屋家の一族が歴代住んできたこの地は、かつては中村（以後、表記を中村とする）といったが今は軽井沢と呼ばれると記している。ただし軽井沢と中村は同じ場所ではないらしい。佐藤不二男の『軽井沢物語』には、「軽井沢は遠い昔は、中村といったと伝えられる。（中略）古老の伝えるところによると、矢ヶ崎川の氾濫の折りに中村地区が流失して、現在の旧軽井沢の位置に移ったのだという。（中略）中村地区から現在の旧軽井沢地区に街が移ったのは、五百年位前のことと思われる。」とある。また泉幾太郎の『町誌 軽井沢』によれば、「諏訪神社の森の南にある茫々たる草原の中央約二万坪を切り開いた平坦の地が野球場である。……この附近は『中村の古蹟』という。（中略）天正十五年一〇月十五日、武田氏の幕下板垣氏と上杉氏の前軍と激戦せる際、民家悉く兵火に遭ひ、又屢時川越石川の氾濫により遂に衰微し、官道の変遷と共に今の地に移りて、軽井沢の基を開くに至れりとか。」とある。

軽井沢宿の程よりテニスコート通りに入り、万平ホテルへ行く途中に矢ヶ崎川にかかる橋があるが、これが中村橋であり、これを東に越えた地区が中村地籍である。この附近がかつての中村があった場所とされる。宿場のような固定した交通集落は一三世紀にはあらかた成立していた。中村は、農業生産はほとんど期待できないことから、専ら

碓氷峠越えの交通で生計を立てていたことは間違いない。

中村から移動したとされる軽井沢宿は、それより高燥の地であり、また沓掛宿から碓氷峠に向かう中山道の、まさに道筋に位置し、しかも二手橋までは矢ヶ崎川を渡る必要がない。一方、中村から中山道をたどるとすれば、現在の中村橋が大宮橋のいずれかと二手橋によって、矢ヶ崎川を二回渡らねばならない。中村が集落の跡地と聞けば意外感を持たれてもおかしくない。中村がかつての宿との伝承が事実とすれば、その時代の道筋は中山道とは異なっていたはずである。徳川家康は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いの一年後、それまでの東山道を中山道に改めた。中村の立地は、中山道以前の、それとは異なる東山道に沿っていたとでも考えなければ説明できない。そこで碓氷峠西麓の道筋の変遷を検討する。

## 二 碓氷峠西麓の道筋

ここに碓氷峠からの道は中村附近に下っていたとの文書がある。安中藩が一九世紀初頭に編纂した風土記、『安中志』がそれであって、「峠（碓氷峠のこと―筆者注）へかかり南の峰を通り、権現林矢立明神の辺を通り軽井沢へ出たりとなん」と記している。同趣旨のことは前述の佐藤、泉の著書にも記されている。現在、矢立明神は失われており



図1 本論文に出てくる主な地名の位置関係

その位置を確定することはできないが、権現林とあるから、後述の古道の痕跡のある尾根（以後、この尾根を「古道尾根」と呼ぶ）の末端である大宮橋の東南東、三〇〇五〇（あた）りと考えられる（図1）。なおその東に接して今道沢地籍がある。「今道沢」とは、その地名が成立した時点での古道に対する今道の通る沢という意味であろう。『安中志』の古道が「今道」のことかどうかはわからないが、いずれにせよこの附近の古道を想定すれば、中村は好位置を占めていることになる。

筆者は平成二五年に本誌に発表した論文で、碓氷峠越えの路は古くは尾根沿いであり、その後、時代とともにトラバース路に変化してきたと主張した。つまり、この地域の尾根は幅が広く削平の必要がないから、土工力の小さな時代においては一般的な道筋となる。しかし尾根道は一般に、歩行の便のためには好ましくない縦断勾配の変化を伴うから、縦断勾配の平準化のため、時代とともにトラバース路に変化してきたのであった。そして碓氷峠から長野県側に下る路は、古くは「古道尾根」だったろうとの見通しを述べた。以上は専ら地表踏査という限界のある調査による結論であった。

その後の平成二六年、長野県林務部は古道調査に画期的な「長野県型立体地形図（CS立体図）」を整備する。以下、

これを本論文では3D地図と称する。3D地図の特徴は別の論文で紹介したので詳しくはそれを参照されたい。ただここでは3D地図が、従来の地図や航空写真と比べて、地表の細かな凸凹を検出できる能力が著しく高いことを強調しておく。

図2は3D地図であり、図3はこれにより古道を判読したものである。3D地図は本来多色画像であるが、本紙上では白黒画像とせざるを得ず、そのため判読性が低下していることに留意されたい。図3上半における二本線で示した道路は県道旧軽井沢・軽井沢停車場線であり、明治一一年（一八七八）の明治天皇行幸の際に開削されたといわれる。

図2にもその道筋が明瞭に示されているが、その南に接するように存在する縄の目状に走る複数の道跡群は、位置から見て中山道に違いなく、中山道は時代と共に激しく変遷したことが明らかである。筆者は先の論文で、トラバース道も当初は尾根に近いところから始まるが、次第に縦断勾配の平準化を徹底するため下方に推移することを述べた。太い線分が地表踏査による顕著な道跡であり、岡村や筆者がそれぞれ中山道の道筋であると主張したものであるが、数ある中山道の中の末期のものと考えられる。図3において、御巡幸道路の道筋は、数あるトラバース道の最上位と一致し、初期の中山道を踏襲した可能性が高い。将軍秀忠



は関ヶ原の戦いに向けて、東山道を西に進んだが、その際の碓氷峠附近の行路について、安中志は、「峠より定光霊社へかからせ給ひしといへり、爰ハ今の道よりハ少し北に当れり」とある。定光霊社とは碓氷貞光を祀る社である。

当時の道は、尾根の上あるいは数多いトラバース道の上部であったことを指すのであろう。貞光霊社がこれまで中山道と信じられてきた路線から北に離れていることは不思議であったが、秀忠当時は中山道がその脇を通っていたならば納得できる。

図3の下部に、道跡が縄目状に西側に下っている「古道尾根」がある。「古道尾根」は、信上国境から大塚山方向の西山西―東北東に向かって下る尾根であって、南聖沢、清水頭、権現林の各地籍にあたる。この尾根より南に、図の枠外であるが、三本の尾根がある。それぞれ林ノ根、桜の沢丸子山、池の頭の各地籍に相当する尾根であるが、こうした道跡は全く判読できない。「古道尾根」は薪炭などを採取するための単なる里道の範疇を超えて、碓氷峠に至りさらに東方に向かう長距離移動のための道筋であった可能性が高い。なお今道沢地籍の「今道」は、「古道尾根」を辿る古道が、平地に下りる直前の急勾配を避けるため、部分的にトラバース道になったことを指していると考ええる。

ここで中山道と「古道尾根」上の古道についてルート比

較を行う。中山道は軽井沢宿の近くで段丘化した扇状地上を通るが、それより碓氷峠側は全てトラバース道である。当初はトラバース道ではなく、その上方（北）の尾根を通っていた可能性もあるが、碓氷峠から西行し尾根に上がるためには一旦はトラバースせざるを得ないから、そのままトラバースを続けた可能性も高いと考ええる。しかし「古道尾根」の場合は基本的にトラバースする必要はなく、一貫して尾根上を通過することができた。ただし尾根道の必然としてアップダウンを含む縦断勾配の変動がある。碓氷峠越えの道が「古道尾根」から中山道筋へ移行したとすれば、この弱点に加えて、宿の位置が中村から軽井沢に移ったことが原因として考えられる。

### 三 旧河道と新河道

矢ヶ崎川は信上国境の留夫山を水源とし、軽井沢宿の北方、二手橋に向かって南南西に流れ、そのまま方向を変えることなく大塚山とその背後の「古道尾根」の間の地隙を通過して中村方面へ下っている。しかしこの地隙をはさむ大塚山と「古道尾根」は元来一連の尾根であって、ある時期までの矢ヶ崎川はこれに行く手を阻まれて方向を南西に変え、後に形成される軽井沢宿方向に流下、現在の駅前通り附近を南下していたはずである。次第に矢ヶ崎川の河床



が上がり、ある時期に大塚山と「古道尾根」の間の鞍部を矢ヶ崎川が越えることができるようになった。<sup>(12)</sup>このことは、後の軽井沢宿が位置しているところに矢ヶ崎川扇状地が形成されている事実から明らかである。矢ヶ崎川が大塚山―「古道尾根」を通過するようになったきっかけは、必ずしも洪水とは限らない。人間がここを掘削し、大半の水は軽井沢宿方向に流しながらも、中村に必要な用水だけを取得していた可能性もある。しかし中村が洪水に悩まされて軽井沢宿に移転したとの伝承が正しいのなら、次第に中村方向が本川筋となり、新河道となったことになる。

諏訪神社は現在、軽井沢宿より標高の低いところにある。佐藤は古老の言として、「中村当時、部落の北側の丘にあった諏訪神社は、百八十度向きを変えて現在の北向きの社殿になった。今、われわれは、神社に詣でる時、かつて神社の背後にあった森をぬけ、階段を下って社前に詣でるようになった」と書いている。<sup>(13)</sup>これは、矢ヶ崎川が現在の流路を取っていなかったことを前提にしている。神社仏閣は一般的に集落や街道より高い位置にあり、土地が平坦であれば北側にある。根腰の三宿を見ても、軽井沢の神宮寺、沓掛宿の宝生寺、長倉神社、追分宿の浅間神社、泉洞寺、諏訪神社さらには間の宿の借宿の遠近宮などはいずれも街道より高く、しかも北側にある。さらに言えば、三宿の権威

である本陣、問屋も全て北側にある。中国の「君子南面」の思想が強固にあったのである。<sup>(14)</sup>軽井沢宿の諏訪神社だけが例外的に街道の下側でありしかも南側という例外的立地であるが、当時の中村を貫通する道が、神社の南を通っていたとすれば、それも合理的に説明がつく。

しかし問題は新河道形成の時期である。果たして中村から軽井沢宿への移動と時期が一致するのかどうか、また矢ヶ崎川が中村方向へと流路を変えたことが中村、さらにはそれに連なる街道に果たして不都合だったのかどうかについて慎重な検討が必要である。

#### 四 新河道形成時期と流量減少時期

かつては軽井沢宿の方向に扇状地を発達させた矢ヶ崎川が、新河道では全く扇状地を形成していないばかりか、現在も堆積作用がほとんど見られない。このことは、新しく扇状地を形成するだけの時間が無かったというよりは、矢ヶ崎川の流量が減少したことによる可能性が高い。

矢ヶ崎川は二手橋での集水面積が五平方<sup>(15)</sup>に満たない小河川である。二手橋附近から軽井沢宿への引水量如何で、下流の河川状況は激変する。明治三四年発行の絵図、『信州軽井沢之全景』に、軽井沢宿の街道に沿って南および北に二条の用水が流れ、合計四つの大型水車を動かしている



様子が描かれている。<sup>(15)</sup> 大型水車を稼働させるためには矢ヶ崎川のほとんど全水量を二手橋附近から用水として取得していたはずであり、江戸期に軽井沢宿が繁栄し用水の需要が大きくなって以降は、新河道は洪水時の余水吐に過ぎなかったであろう。そしてこれを裏付けるように『信州軽井沢之全景』に二手橋から下の矢ヶ崎川が全く描かれていない。これはデフォルメされた地図であるから省略されたとの見方があり得るが、何本もの道が橋などを架けることなく矢ヶ崎川のあたりを通過していることを見れば、ほんの小川程度だったことを示している。明治になって軽井沢町は郵便配達的手段として別荘番号制を敷いたが、大正一四年（一九二五）に別荘番号を改訂し、今日に至っている。

二手橋から支川である桜ノ沢が合流するまでの矢ヶ崎川について、兩岸とも同じ一〇〇番台であるが、桜ノ沢の右岸は一〇〇番台、左岸は一二〇〇〜一三〇〇番台と地区を分けた。このことは支川である桜ノ沢よりも矢ヶ崎川の方が、交通の支障あるいは景観上の断絶感が小さかったことを示している。なおこの別荘番号が設定された大正一四年は水道が開通する数年前であるから、矢ヶ崎川の水量は依然として大半が用水に取られていたはずである。水道が設けられ、用水の必要性は減った今日でも、水道の原水を上流で大量に取水しているのであるから、矢ヶ崎川の水量

は、旧河道時代よりも大幅に減っていることに違いない。新河道に扇状地が形成されなかったのは当然である。逆にいえば、新河道の形成は、用水需要が著しく増大、新河道の流量が減少した江戸時代初期を大きくは遡らなかったことが確実である。

## 五 新河道による中村に連なる街道筋の湿地化

現在の矢ヶ崎川は二手橋下流で幅一〇〜一五<sup>16)</sup>、深さ二〜四<sup>17)</sup>の河道を持ち、基本的にこの形状を維持しながら泥川を経由して湯川に合流する疎通能力の高い河川である。しかしこの河道の規模は恐らく戦後の河川改修によるものであって、以前は先にも見たように小川の範疇であったらしい。新河道は今日、折れ線状を成し、それぞれの線分は全て直線状である（図4）。自然河川ならば蛇行するのが常であり、直線は人工河川の証である。明治一四年に軽井沢絵図が作成されているが、その時点で新河道は既に直線河川／＼人工河川であった。人工河川にせざるを得なかった理由は、河道が未熟で自然河川のままでは洪水時の余水吐としての機能を期待できず、河道の直線化と河床掘り下げを行い河川水の疎通能力を高める必要があったからである。なお、明治一四年絵図に見える人工河川化は、明治以後の軽井沢宿の零落ぶりを考えれば、江戸時代のことと考える

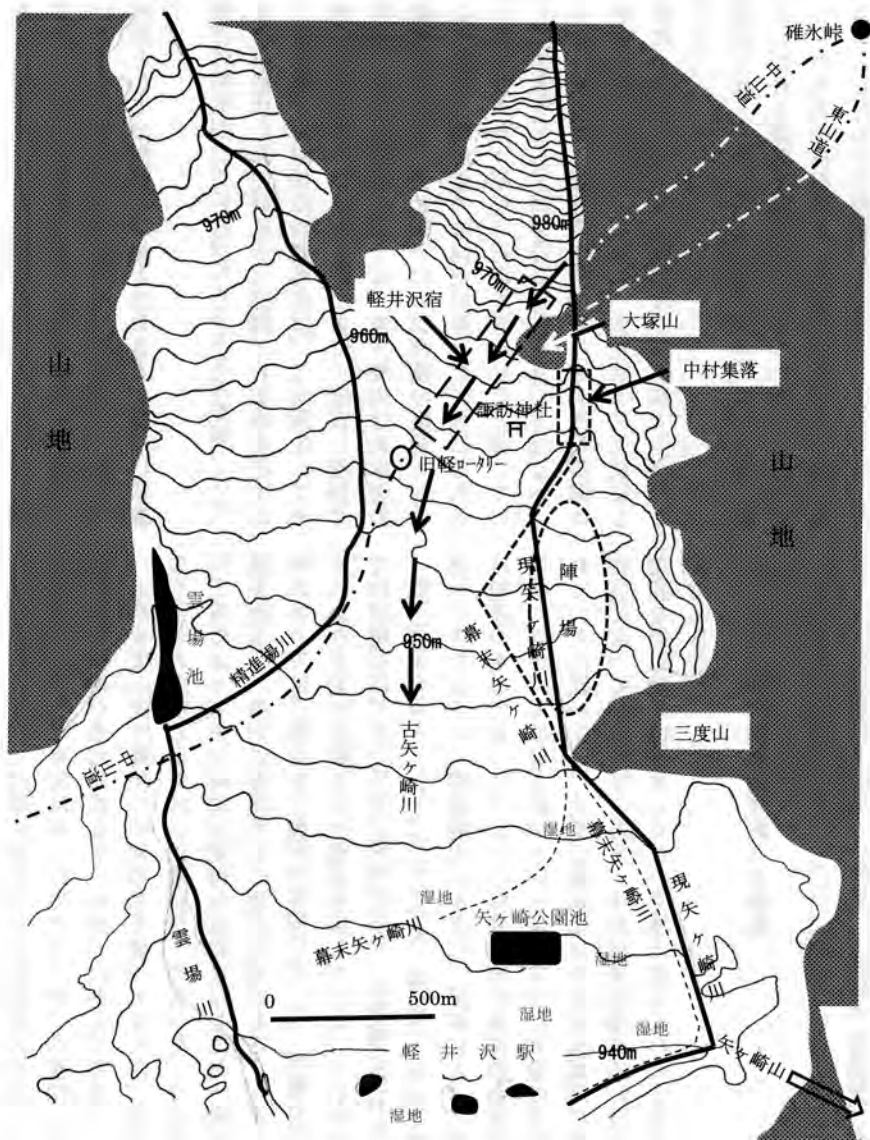


図4 軽井沢駅周辺の地形

べきである。新河道は三度山の裾の湿地に入ると五つの細い支流に分かれ、内一本はかろうじて南下を続け雲場川に合流しているように見えるが、基本的に湿地の中に消えてしまう。河川としては極めて未熟と言わざるを得ない状態であった。

軽井沢地方は明治四三年に大雨による大水害を蒙ったが、政府はあまりの惨状に高田の第十三師団工兵部隊を復旧に投入した。その際、師団長の長岡外史は、工兵隊をしてそれまで曲がりくねっていた小川を鉄道まで一直線に掘削せしめたとする<sup>(16)</sup>。しかし前述のように、矢ヶ崎川は大水害の前から直線河川であり、彼が行ったのは流路の変更と河床の掘削による河川水疎通能力の向上であった。孫にあたる浅吹登美子は、彼が矢ヶ崎川の石垣を造らせたと書いている<sup>(17)</sup>。しかし河床を掘り下げた程度は今日見るほどではなかったらしい。中村橋の脇に西村伊作郎があるが、その敷地は現在の河床より約二<sup>(18)</sup>尺高い。しかし、大正末ごろに買収した頃は河原だったといい、矢ヶ崎川は小川程度であったことを裏付ける。

なお明治四三年（一九一〇）の大洪水の際に、今日、軽井沢銀座といわれる道筋を濁流が流れ下ったが、それは二手橋下の二レの大木を林田某という男が切り倒し、流下を食い止めようとしたものの濁流の中に横倒しになって、そ

れが堰止めとなって道路に溢れ出たのが原因のひとつだとされる<sup>(19)</sup>。そうした事実があったのだろうが、本質的には新河道への転換が未だ完成していなかったからである。

これまで「矢ヶ崎川」の河川名を使ってきたが、実は少なくとも大正初めまでは「川越石川」であった。今日は河川工事によって矢ヶ崎川は明確な流路をなして矢ヶ崎山の麓を流下し、湯川に合流する一連の河川である。しかし当時にあつては三度山より南側の湿地によって、川越石川と、それより下流は分断された様相を呈していた。これがかつては川越石川であつて矢ヶ崎川でなかった事情と思われる。新河道をとるようになってからの矢ヶ崎川はこれまで綴々述べてきたように、疎通能力の小さな、湿原に入つて消える程度のものであつた。しかし軽井沢宿の水需要が発生する前にはかつての矢ヶ崎川と同じ、はるかに大量の水が流れていたに違いない。大量の流水により新河道周辺は湿地状態になっていたはずである。中村は居住地あるいは宿の機能を果たすには好ましくない立地と化していたと見るべきである。

## 六 中村から軽井沢への移転

中村地籍の南五〇〇〇八〇〇<sup>(20)</sup>、現在の「サナトリウムレーン」の周辺は上陣場、中陣場、下陣場の各地籍である。

これは相当規模の合戦の跡あるいはそれに備えた跡と考えるべきである。宿とはもともと「軍營」の意味で使われていた語である。<sup>(20)</sup>この合戦の目的は、宿とそれに連なる道の獲得・占領であつたろう。そしてその宿と道は、これら陣場の位置から見て現在の軽井沢宿とそれに続く中山道ではなく、中村とその背後の「古道尾根」上の道であつたはずである。なお河道が中村方向に転換した後の時代であつたと仮定すれば、陣場附近は湿地状態に化していたはずであるがこれは考え難い。ここは、矢ヶ崎川が軽井沢宿方面に流れ、中村が宿の機能を果たしていた環境下で、未だ乾燥していた上陣場、中陣場、下陣場が戦場となつたと考える方が自然である。

『軽井沢町志』は、『甲陽軍艦』によつたのであろう、上記の陣場は、武田軍が天文一五年（一五四六）に志賀城を救援に來た上杉軍を迎え撃つた戦場としている。先の泉の著書も同様の記述である。しかし、『甲陽軍艦』より信頼性が高いとされる『妙法寺記』や『勝山記』によれば、この合戦は天文一六年（一五四七）のことであり、しかも場所が御代田町の小田井であつて、軽井沢ではなかつた。<sup>(21)</sup>実は『軽井沢町志』には大きな混乱があり、この際の上杉方の先鋒は大導寺政繁であつて、大ヶ塚（大塚山のこと）に陣を張つたことにより、これを大導寺馬寄場といつたとし

ている。<sup>(22)</sup>ところが彼は当時十二歳前後であつて到底先鋒を努める年齢ではなかつたし、何よりも北条氏傘下であつて上杉氏傘下ではない。政繁が碓氷峠付近の合戦で勇名をさせるのは、五〇年近くも後の天正一八年（一五九〇）であり、小田原責めのため関東に侵入しようとした前田利家・上杉景勝を碓氷峠付近で一旦は撃破した時のことである。<sup>(23)</sup>つまり軽井沢町志は天文一五年と天正一八年の合戦を混同しているのであつて、上陣場、中陣場、下陣場の設定が天文一五年でないとなれば天正一八年のこととなるのである。筆者は上陣場、中陣場、下陣場は天正一八年の合戦に備えたものであつたと考えたい。

先に慶長五年（一六〇〇）の秀忠軍は中山道筋を辿つたことを述べた。すると古道から中山道に移つたのは一五九〇年と一六〇〇年の間の一〇年間に絞られることになる。日本活火山総覧（第4版）<sup>(24)</sup>に従えば、慶長元年（一五九六）に浅間山が、火山爆發指数（VEI）が三を示す大爆發を起こしている。これは天仁元年（一一〇八）、大治三年（一二八）、天明三年（一七八三）のそれぞれVEIが五、四、四の大噴火に次ぐ、史上四位のものであつた。この慶長元年の大噴火にとどまらず、一五九〇年代は全般的に浅間山の活動が盛んな時代であり、矢ヶ崎川の河床が急速に上昇、大塚山と「古道尾根」の間の鞍部を洪水が通過するように

なった可能性がある。秀忠軍は三万八千人であったというから、事前の道路整備も大々的に進められたことであろう。古道に加えて新たな中山道が開削された可能性も充分あり得ると考える。

中村が交通集落であったことは間違いないが、「中村宿」と呼ばれていたのかどうかはわからない。中村も中村宿も文書上では全く知られていないからである。一方、「軽井沢」の地名は天正四年（一五七六）二月二十八日の武田勝頼の文書に「佐久郡軽井沢地下人に、普請役等の諸役を免ず」に出てくる。<sup>(25)</sup> また真楽寺山門（応永様式）の木造金剛力士像後頭部墨書銘に旦那名「追分講同佐久二郎、軽井沢□市右衛門……応永二年（一二九五）」と記されている。<sup>(26)</sup> これは軽井沢地名が応永年間に既に存在していたことを示すものである。ちなみに「軽井沢宿」の初見は寛永三年（一六二六）年である。中村という集落名と共に軽井沢地名が共存していたことは明らかである。しかもその間の距離は四〇〇弱にしかならなかった。これは地域名としての軽井沢の中に小さな中村集落があったことを示すものであろう。この場合、何故に地域名を集落名としなかったのかという疑問が残る。

佐藤織部は軽井沢宿の本陣・問屋を勤めた佐藤家の祖である。この織部について、天正一一年の文書に「佐久郡佐

藤織部丞、碓氷峠に還住して、北条氏政のために力を致さんことを誓ふ、是日、氏政の将大道寺政繁、之を褒し、向後の協力を求む」<sup>(28)</sup>がある。佐藤一族が碓氷峠をまたぐ交通管理と、時の有力大名のための軍事的任務を果たすためには、生活基盤が整い多人数が居住可能な中村のみならず、碓氷峠の熊野神社周辺にも人員を配置しなければならなかったに違いない。熊野神社は世俗の権力を支えるための宗教的権威でもあったし、その施設は社家の並ぶ街道から見上げれば山寨そのものであって、兵の配置の為のものであったと考える。また図2の矢印の先には二つの土堤で囲まれた長方形の区画が見えるが、これも相応の人員配置が必要な軍事施設だった可能性がある。

佐藤織部の父、豊後守は上野側から入山峠を経ての侵入を防ぐため、二男右馬助を入山峠の信濃側の麓、境（今日の境新田）に配置したとの記述がある。<sup>(29)</sup>「中村」という地名一般の起源は、分村に対する本村を指すとされる。<sup>(30)</sup>峠は、かつては坂と呼ばれ、今日の精密な地形図によって初めて明示されるような「点」ではなく、拡がりをもった「面」概念だったらしい。『甲陽軍鑑』は笛吹峠（碓氷峠のこと）と軽井沢を区別してないように見えるし、大導寺と前田・上杉の戦いを記した文書も同様である。碓氷峠や中村、そして境はひとつの村連合を形成しており、中村は本村的役

割を果たしていた故に中村と呼ばれていたのではないか。しかし戦国時代が終わると、峠町は熊野神社を中心とする宗教機能、軽井沢は交通機能に分化し、分村―本村の関係は失われた。「中村」という分村―本村の関係を明示する必要はなくなり、また交通の増加と共に遠方を行き来する旅人も増え、理解しやすい地域名つまり「軽井沢」を宿場名とする方が都合良くなったのであろう。

軽井沢宿は中村から移転したとの伝承は事実であり、その時期は中世から近世への移行期にあたる。

中村は北側と東側で山に近接する。南の後の国鉄軽井沢駅付近は強度の湿地である。西側の後の駅前通り附近には、矢ヶ崎川が流れていたから、それらに囲まれた中村は要害の地であった。しかし戦国時代が終われば、この要害の重要性も相対的に低下したはずである。他方、交通の増大は歩きやすい中山道筋を誕生させ、それに連なり、また河道の移動により高燥の地となった扇状地の中軸に近世の軽井沢宿をもたらしたのであった。

本論文で「百姓持タル城」<sup>(31)</sup>あるいは「山小屋」<sup>(32)</sup>には触れなかった。しかし軽井沢宿本陣に連なる江戸時代早期の佐藤市右衛門は、その遺言状に「こや上がり」を厳しく戒めた条がある。<sup>(33)</sup>このことは「山小屋」の存在とその利用があったことを示すものである。大塚山あるいは愛宕山がそれら

に比定されるのであろう。中村は軍団の衝突する場であり、それに備えた立地が選ばれたのであろうが、宿が主導した軍事施設もあったことは注目される。

本論文作成にあたり、国土交通省北陸地方整備局および長野県林務部が整備したDEMデータに基づき、長野県林務部が作成したCS立体図を使用させていただいたが、「古道尾根」上の古道などはこれなしには探查が極めて困難と思われ、その有効性は明らかである。

註1 網野善彦、一九八七、『境界領域と国家』、『日本の社会史第二巻境界領域と交通』、三二―八頁

2 藤木久志、一九八八、『村の隠物・預物』、網野ほか編

『ことばの文化史 中世1』、平凡社、二五〇頁

3 佐藤芳壽、一九七九、『先祖を想う 軽井沢本陣 佐藤家の歴史』、四頁、一六頁

4 佐藤不二男、一九七六、『軽井沢物語』、軽井沢書房、八四―五頁

5 泉喜多郎、一九五三、『町誌 軽井沢』、軽井沢町誌編集会、一〇二頁、文中に「天正十五年」とあるのは「天文五年」の誤り。

6 榎原雅治、二〇〇八、『中世の東海道をゆく』、中公新書、二九頁

7 安中志、『群馬県資料集 第一巻』、一九六七、群馬県文化事業振興会、一九一頁



8 「古道尾根」の東南東斜面の中ほどから沢の地区が字・今道沢である。

9 江川良武、二〇一三、「碓氷峠道の変遷―尾根道からトラバース道へ― その二」、「信濃」第六五巻第三号、二四四頁

10 江川良武、二〇一六、「長倉牧の軽井沢比定説について―3D地図などによる検証―」、「千曲」、第一六〇号、東信史学会、四〇五頁

11 碓氷峠から軽井沢宿までの中山道の内、軽井沢宿に近い区域を表示していないが、CS立体図の整備範囲から外れている。仮に整備されていたとしても、別荘地造成が著しく、古道はほとんど破壊されていると思われる。

12 地形学上の「貫通尾根」である。『地形学事典』、一九八一、二宮書店、一二三頁参照

13 前掲4、八五頁

14 「礼記」に「聖人南面而治天下（聖人は南面して天下を治む）」とある。

15 軽井沢古書りんどう文庫、『信州軽井沢之全景』、明治三四年刊行、一九九八再発行

16 穴戸實、一九八七、『軽井沢別荘史』、住まいの図書館出版局、一四〇頁

17 朝吹登美子、一九八五、『私の軽井沢物語』、文化出版局、八頁

18 前掲17、一二〇頁

19 前掲16、一四〇頁  
20 前掲6、一九一頁

21 菊池清人、上原邦一編、一九八〇、『佐久の歴史年表―佐久の郷土資料集』、一九七頁

22 岩井傳重、一九五四、『軽井沢町志』、軽井沢町、三〇四、三四三頁

23 徴古雜抄十一中、『信濃史料』、巻一七、一〇二頁、「白井峠で大導寺政繁軍が前田利家・上杉景勝軍を大いに破る」

24 氣象庁、二〇一三

25 佐藤文書、『信濃史料』、巻一四、一四三頁

26 金剛力士像、『信濃史料』、巻七、二八〇頁

27 佐藤文書、『信濃史料』、巻二四、三三二頁

28 諸州古文書、『信濃史料』、巻一六、三三三頁

29 前掲4、一六頁、

30 ニコニコ百科

31 <http://dic.nicovideo.jp/a/%E4%B8%AD%E6%9D%91>

32 前掲2

33 笹本正治、一九八四、『戦国時代の山小屋』、『信濃』、七月号、四九九―五一五頁

34 佐藤喜久一郎、二〇〇七、『近世上野神話の世界』、岩田書院、八一頁

# 近世移行期における浅間根腰三宿の移動 その二 沓掛宿・追分宿

— あわせて3D地図の有用性を検証する —

江 川 良 武

前論文「その一」では軽井沢宿について論じた。本論文では沓掛宿と追分宿を検討する。

## 一 沓掛宿

### (一) 安永の大火と沓掛宿の「移転」

沓掛宿は中軽井沢の国道一八号線沿い商店街にあった。伝承によれば沓掛宿はかつてそれより南、約二〇〇メートルにあったが、安永二年（一七七三）に一三四軒の内一〇四軒が焼失し、現在地（国道一八号線沿い商店街のこと、以下、同様）へ移転したと伝えられる。<sup>(1)</sup> 岩井傳重は同様に軽井沢町志において、前沢から西に向かう中山道は、移転後の沓掛宿の位置に至るため、図1の如く、大きく北方へ迂回しなければならぬが、元の宿場であればそうしたこともなくに自然につながり、さらに西方では発地線（県道・豊昇—中軽井

沢停車場線のこと、著者注）鉄橋北側の堀割りを通過していたとした。<sup>(2)</sup> しかし武部健一はこの移転説を否定、沓掛宿は安永の火災より約一〇〇年も前に既に現在地にあったことを明らかにした。元禄元年（一六八八）ころの作成とされる尊経閣文庫所蔵の北国海道絵図に沓掛宿が現在地に描かれており、また享保年中（一七一六—一七三六）の浅加久敬『道中記』にも同趣旨が書かれているからである。<sup>(3)</sup> 岡村知彦も北国海道絵図に加えて、大火の少し前の宝暦六年（一七五六）に刊行された『岐蘇路安見絵図』に、沓掛宿が現在地にあったことを示唆する湯川東岸の道が描かれていることから、件の宿場を「架空の古沓掛宿」と断じている。<sup>(4)</sup>

### (二) 沓掛宿と用水

沓掛宿は湯川の扇状地上に位置している。沓掛用水が扇状地の上部より宿場まで引かれ、かつては生活用水を供給

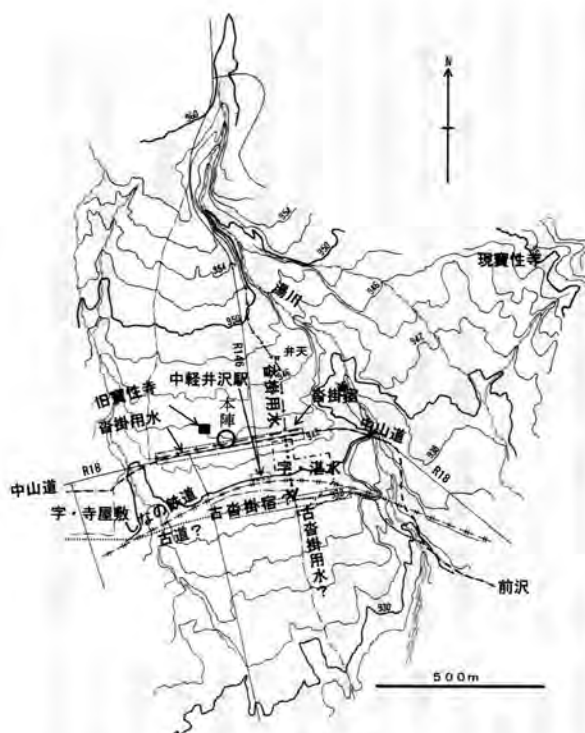


図1 沓掛宿周辺の地形と地名

していた。水道が普及した今日、用水は下水道の機能しか果たしていないが、依然として清流が側溝を流れ続けている。この流路は図1の如くであり、屈曲しながら扇状地の東よりを南下し、宿場の東端近くで直角に水路を曲げほとんどの水量を西側の宿場に、ごく一部を東側に配水している。仮に用水を国道一四六号線のやや西の扇状地の中心線附近を通せば、標高が一番高くて分水しやすく、かつ本陣

平は「旧沓掛宿用水の怪」として、古沓掛宿の附近に用水跡が見えないことを不思議としているが、地名など痕跡はあるとも言えるのである。武部や岡村のいうように元禄以後は現在の位置に沓掛宿が存在し続けたことは確かであるが、この扇状地―用水―流路―地名―宿場の関係は、元禄より以前のある時期まで、「古沓掛宿」が南にあったと想定したくなる一つの根拠である。

のある宿場の中心附近に到達するのであるが、わざわざ屈曲させて東のへり近くを通してゐるのは不思議である。用水が東西に方向を変える地点の南に「湛水」という小字地区が拡がっている。ここは用水が及んでいない地区であるが、湛水という水にちなんだ地名であることが注目される。もし伝承のように、現在より南二〇〇mに古沓掛宿があったとするなら、沓掛用水は現在地を突つ切り湛水地籍を通してそのまま南に引水されていたはずである。「古沓掛宿」の附近では用水の軸は扇状地の中心線に近く、宿場の中心附近に流れ込み、かつ東西に等分に配水されていたことになるから、そもそも「古沓掛宿」を指した用水ならば合理的な流路であった。土屋長

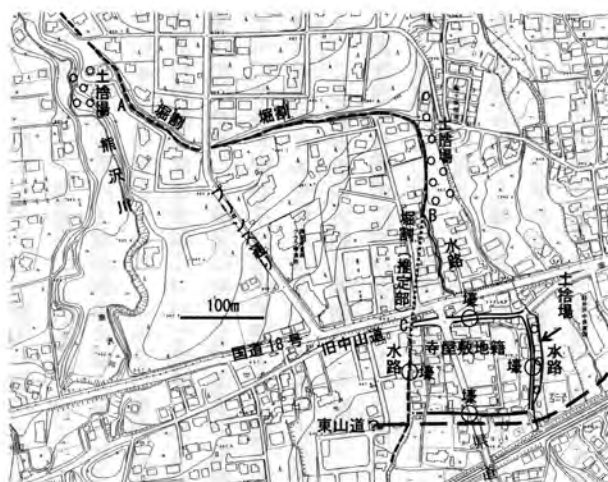


図2 寺屋敷地籍付近の地形



図3 寺屋敷地籍附近の3D地図(元図はカラー)

### (三) 城館たる寶性寺

中軽井沢駅の西約七〇〇メートル、岩井新聞店の東南に接して、東西約一五五メートル、南北約一三〇メートルの壕と見られる四本の凹地に区画された長方形の土地がある。なお、この区画は県道・豊昇―中軽井沢停車場線によって東西に分断されているが、これは近代のことであり、元々は一つの区画であっ

た。北側の凹地は幅員約四・五メートルの旧中山道であり、南側の凹地は幅員一・五メートル・二・〇メートルの道路であって前記の安永大火以前の中山道の跡との説があり、「旧旧中山道」と呼ばれる場合もある。東側の凹地も幅員約三・三メートルの道路である。西側は直線状の水路である。この西側水路の内側約二〇メートルに幅員一・五メートル・二・〇メートルの道路が並行して南北に走

るが、何ら凹状をなさず、近年の道路と思われ壕ではないと見る(図2)。著者は、3D地図(図3)を判読していた際にこの長方形の土地が四本の壕と見られる凹地に囲まれていることに気がついた。この3D地図とは、長野県林務部が長野県のほぼ全域について整備したものであって、著者は先に発表した論文において、従来の地図や航空写真と比べ、地表の細かな凸凹を検出できる能力が著しく高く、歴史研究のための新たなツールであると主張したものである。<sup>(8・9)</sup>この長方形の区画の地籍は「寺屋敷」である。

寶性寺は沓掛宿における唯一の寺であり、現在の中軽井沢の北東九〇〇<sup>(10)</sup>の小岩地籍にある。しかし昭和三九年まで沓掛宿の中ほどから北に約八〇<sup>(11)</sup>入った堀地籍、現在は商工会館の建つ土地にあった。さらにその前はこの寺屋敷にあったとの伝承がある。泉喜太郎は次のように書いている。「当寺は現在の地(堀地籍のこと——著者注)より三町西方寺屋敷地籍に(現在の沓掛堂坂の左一帯鉄道線路境)美麗を盡せし寺院があったが明治元年六月焼失其の後正保時代秀海法師開基の場所を離れて現今の地に堂宇を再建するも弘化元年(一八四四——著者注)護摩堂(現在庫裡)を残して焼失現在に至る<sup>(12)</sup>」。これによると寶性寺が寺屋敷にあったのは、正保時代(一六四四—四八)までということになるが、岩井は秀海法師の活躍時期は慶長、元和(一五九六—一六二

三)のころとしており、矛盾がある。しかし江戸時代初期までと見ておけば良いだろう。<sup>(12)</sup>なお上記の泉の文中に、焼失が明治元年とあるが、正保より前であるから間違いである。寶性寺の故地は寺屋敷であり、壕によって囲まれていることが明らかとなった。また小諸軽石流による台地の縁にあり、東に中軽井沢扇状地を見下ろす位置にある。寶性寺は純然たる宗教施設ではなく、軍事施設でもあったと見るべきである。

#### 四 寶性寺北方の壕

寺屋敷地籍と同じ台地上の西北約二〇〇—三〇〇<sup>(13)</sup>に、大きな堀割がある(図2、3参照)。寺屋敷を囲む壕と区別する必要から、ここでは敢えて「堀割」と呼ぶ。堀割は幅五—一〇<sup>(14)</sup>、深さは大きいところでは五・五<sup>(15)</sup>—六<sup>(16)</sup>に達し、底には水深十—数十<sup>(17)</sup>の水が流れており、熊沢川から引水、中軽井沢扇状地の西端を流れる川に導水している。堀割の深さに対する幅が極端に狭い地隙状をなし、水路の方向も等高線と略平行であって、到底自然河川とは言えず人工であることは明らかである。この堀割は北の「上ノ原」、南の「平野」などの地籍の境をなし、相応の古さを持っていることを示している。現在もわずかに農業水路として利用されているようであるが、堀割はこのために掘削されたとは考えにくい。熊沢川の水量自体が少なく、取水量が限

られている。またロイヤルプリンス通りがこの堀割を通して  
 する際に埋立てをしているが、水流を確保するためにこれ  
 に埋設している円管の径は九五（五・七）に過ぎず、しかも管の  
 下部は土砂の堆積による断面の縮小が見られ導水量は僅か  
 である。「農業用水」は膨大な工事量に見合わない。中軽  
 井沢扇状地の扇頂部近くから引水した方がはるかに合理的  
 だったろう。この流路においてA地点より上流は近年にお  
 ける用水路整備によって流路変更がなされているが、元々  
 はこの附近が取水地点だったと思われる。A地点附近の熊  
 沢側の谷底平地が狭くなっているが、堀割を掘削した際の  
 土捨場として使われたためであろう。B地点より東南に現  
 在の流路が形成されているが、それより上流では平面形が  
 長い弧状をなし計画的な掘削を窺わせるのに対し不規則に  
 屈曲しており、西側の台地からの土砂移動によって東に押  
 しやられたのであろう。B地点より東側には掘削土による  
 と思われる台地が広がっており、A地点の土捨場と合わせ  
 て、工事量の大きかったことがわかる。元々の流路はC地  
 点に向かい、件の寺屋敷西側の壕に流れ込んでいたと見る  
 のが自然である。なおC地点は、四本の壕の標高が一番高  
 い場所である。

橋口定志は方形館に関する従来の研究を総括しているが、  
 堀の機能として、防御ばかりでなく灌漑用水の支配あるい

は冷水の温水化のため側面を強調しているように思われる。<sup>(13)</sup>  
 しかし当時の軽井沢地方は基本的に非農業地域と見て良い  
 と思われ、この堀割は北方からの侵入に備えた防御施設で  
 あるとともに、四本の壕に水を導水するための純然たる軍  
 事施設だったと考えたい。

堀割を掘削した作業量は人口が希少の地にも係わらず膨  
 大であった。在地の人々の労働力が動員されたに違いない  
 が、強制だけでこのような土木工事が可能だったとは考え  
 にくく、自主的だったのではないだろうか。だとすれば、  
 寶性寺の軍事性は、沓掛宿が他の宿や村に対して独立を維  
 持し利権を確保するための、藤木久志のいう「百姓持タル  
 城」あるいは笹本正治のいう危急の際に逃げ込むための、  
 「山小屋」、つまり民衆のアジール<sup>(15)</sup>だった可能性もあると考  
 える。ただし寶性寺の面積や堀割の規模は、一般の「百姓  
 持タル城」を超えているようにも思われる。大名などの大  
 きな軍事勢力が軽井沢地方に進出した際には、一時的にこ  
 れを利用することもあり得たであろう。

#### (五) 交通管理と寶性寺

寶性寺が「百姓持タル城」であったとすれば、それは沓  
 掛宿の一つの装置であったことになる。両者は不可分の関  
 係となるが、ここでは權威の象徴としての寶性寺に焦点を  
 当てる。寶性寺は、先の泉によれば「美麗を盡せし寺院」



であつたというが、その経済的基盤は何であつたらう。非農業地域である当地方においては、それは碓氷峠を越える交通の管理、支援によって収入を得る以外に考えられない。具体的には「兵送り」、「宿送り」と呼ばれる用心棒代や関料などであつたらう。関の乱立は室町中期以降の顕著な現象であつた。<sup>(16)</sup> 信濃国における具体資料は見当たらないが、福島正義は織田信長が武田勝頼征討の理由に武田家が新関を設けて庶民を苦しめたことを指摘し、実際に信長は天正一〇年に武田氏を滅ぼした後、甲斐、信濃の関所を撤廃したことを明らかにしている。<sup>(17)</sup>

寶性寺の創設は長倉郷領主、多門院によって鎌倉時代になされたというが、彼は武士と見るのが自然であらう。武士は、交通路の掌握を強く意識して居館の立地を選び、さらに戦国時代は敵方間諜の取り締まりや味方間諜の保護、塩、米、煙硝などの軍事物資の移動管理で一族郎党を養い、そして大名は自軍の軍営として「宿」を取り込み、「宿」を城郭化、宿城とするのが常であつた。<sup>(20)</sup> これらの行為は軍事力をもって初めて可能となるが、中世においては、特に峠の交通管理はいわば宗教的に行われていたといわれる。<sup>(21)</sup> 荒ぶる神が支配する峠道において関料とは初尾、上分として神仏に捧げられるものであり、関を設定し、関料を徴収する権力は武力であつたとしても、権威として世俗を捨て

た寺社を利用したはずである。<sup>(22)</sup> 寶性寺は御代田町の真楽寺の末寺であり、現在は真言宗智山派に属するが明治初年までは修驗道醍醐派報恩院配下のれっきとした修驗寺院であつた。修驗組織こそが古代的交通形態の特色をなした、京をひとつの極とする放射型の交通形態を、中世の地方組織を母胎とするいわば多極的な形態に変えたいわば交通の主役であつたのであり、関料を徴収する主体としては誠に適切だったと言える。

#### (六) 沓掛宿の移動

中山道あるいは国道十八号線は、寶性寺の故地である寺屋敷地籍の北側を通る。しかし前論文でも示したところであるが、根腰三宿における寺社、本陣は「君子南面」の原則から全て中山道の北側にある。寶性寺は、江戸時代初期以降は中山道の北側、掘地籍にあつた。唯一の例外は軽井沢宿における諏訪神社であるが、これは街道の付け替えによるものであつて、やはり元々は諏訪神社も南面していた。寶性寺が寺屋敷地籍にあつて大きな権威を持っていた時代、道路はこの南側を走っていたと見るべきである。ここに沓掛宿が現在地よりも南にあつたとの伝承が復活する。しかし岩井がいうような前述の寶性寺地籍の南側の塚が道ではなく、図2に東山道?として示したように、さらに南、つまり現在のしなの鉄道附近を東西に走っていたことであらう。

寶性寺は慶長三年（二五九八）に「本堂庫裏并に什物田記焼亡仕り候」とあり、「中興開山、法印秀海、慶長度寺場元和三年見立」右秀海代」とある。<sup>(24)</sup>江戸初期には一転して衰退していったらしい。福島正義は、信長による関所の撤廃は、「これを領有してきた寺社に深刻な影響をおよぼした。」<sup>(25)</sup>としている。最早、寺社が関料を徴収できる時代ではなく、さらに寶性寺の軍事性の低下とともに宗教的權威も衰えていたはずである。古沓掛宿が現在位置に移転したいきさつは明らかでないが、大火であった可能性は大きいと考える。大火によって移転したとの記憶が、いつしか「安永大火」と結びついてしまったのではないか。移転時期は、寶性寺の掘地籍への移転が江戸時代初期というから、この頃であったと見るべきである。その際、寶性寺に対する「君子南面」の原則は最早薄れていたことになる。

これまで寶性寺を沓掛宿との関連で取り上げてきたが、その西隣の古宿と関連づける考え方があり得る。古宿には宿のついた字名が存在するが沓掛に見られない。久保田順一は群馬県下の調査から宿地名の有り無しは宿成立の中世、近世に対応する場合が多いという。<sup>(26)</sup>同様のことはさらに西の借宿と追分の関係についても言えよう。沓掛、追分と古宿、借宿を対比させてみれば、前者が交通の要地にあるが用水なしでは成り立たないのに対し、後者は交通の要地の

側面は弱い一方、河川水に恵まれた土地ということである。古宿、借宿の方が、生産力の低い時代の自然村の要素を残し、沓掛、追分は、用水さえ開削すれば宿の交通管理支援機能として優れ、近代的といえそうである。何よりも沓掛宿は湯川とその支川に囲まれており、防衛性が強く求められた中世末期には他に勝る好立地だったはずである。ここでは取りあえず寶性寺と沓掛宿を一体のものとして考えておきたい。

## 二 追分宿

### (一) 江戸時代における追分宿の移動

追分宿についてもかつては現位置よりも東あるいは東北にあったとの説がある。吉沢好兼は「四鄰譚藪」<sup>(27)</sup>において「昔追分は、今の東にあり、慶長の末、洪水に亡村すといへり……」としている。また岩井は「旧宿は堂裏・測候所裏付近にあった」とする。しかし追分宿は中山道随一の高所にあり、河川水に最も縁の薄い土地である。近世における参勤交代に備えた宿場にあつては、しっかりした用水施設の存在が不可欠であった。追分宿は、慶安三年に引かれた御影用水によってはじめて成り立つのであり、それまでの宿場は、東の精進場川の附近か、本陣や脇本陣油屋附近のわずかな水流のある地点に、小さなもののみが可能であつた。

(28) 御影用水の開通によって宿場は西方に伸びることができたのであって、その意味で「東にあった」は当たっていると考え。こうした江戸時代における宿場の移動の議論があるが、中世には宿場が別の場所に位置していた痕跡がある。

## (二) 下諏訪神社

追分宿に上社とも呼ばれる諏訪神社がある。かつてこれとは別に、下諏訪神社が追分宿信号の南南東約四〇〇メートルに

あった。岩井は次のよう

に述べる「下社は宿の西

部南方約二町の参道の奥

鳥居・常夜灯・水盤・浄

火器等あり、本殿・拜殿

等老樹蒼々たる森間に

あったが、明治四年、引

移り合祀の処、同四一年

神社統合令によって完全

に上社に合祀奉祀となっ

た<sup>(29)</sup>。跡地は現在、草に

覆われているが、注意深

く観察すれば凹地があり、

そこにあったと伝えられ

る池を想起させる。3D地図上では明瞭であり、水を堰き止めるための土堤や池の形状を示す湖岸段丘状の模様を見ることができ、確かに池であったことを確認できる(図4)。嘉応元年(一一六九)の奥書のある般若経が上諏訪神社から発見されているが、元々所蔵していたのはこの下諏訪神社であつたらう。

## (三) 備前屋敷

「土屋備前守」の居館であった「備前屋敷」なるものが



図4 古追分宿附近の3D地図(元図はカラー)

追分の南にあったとの伝承が地元に残る。土屋長平は実地踏査によって、池尻地籍にその壕址があると主張した。<sup>(30)</sup>それに対して遠藤 丘は、池尻地籍に壕はあるが、江戸時代初期に開削された用水堰の跡である可能性が極めて高く、備前屋敷ではないとし、代わって池尻地籍の南方約六〇〇×<sup>(31)</sup>の備前林地籍こそがそれであると示した。宮原武男も遠藤の説に従っている。<sup>(32)</sup>

3D地図によって池尻地籍の壕を判読すると、その始点より現在の御影用水の暗渠区間が始まり、壕の終点で暗渠区間が終わることが明瞭である。また壕の平面形状が開渠区間の御影用水と類似した等高線状をなしているから、池尻地籍の壕は、暗渠が出来る前の御影用水の壕であることは明らかである。備前林地籍の判読結果は、遠藤、宮原による図面とほぼ一致する。ただしそこに示される道路を挟んで「城跡」と反対側の土塁や壕は見えず、3D地図が彼らのような長年の経験・学識に基づいた調査を超えることはできないことを示している。なお環壕に囲まれた平地は約六〇〇×五〇〇、壕の深さは約二・五メートルである。

遠藤は、備前林地籍の北四〇〇×<sup>(33)</sup>に「幅三、深さ一・五」の空堀遺構が部分的に土塁をとない東西約三〇〇×に渡って構築され、台地を分断している」とした。彼の記述はそこで終わっているが、この空堀遺構と思われる東端、

吉野坂地籍に、館を開んだと思われる環壕が3D地図上で明瞭に読みとれる。環壕に囲まれた平地は約一〇〇×五〇〇、壕の深さは約一・〇メートル、二・五メートルである。この場所は今日の追分集落から下る幅の広い谷に面した台地上であり、監視、防衛を旨とする館として誠に適切であった。ただし規模が小さく大部隊の戦闘に備えたものとは思われない。この環壕がほとんど注目されてこなかった大きな原因は、北側の壕が現在道路として使われているため、近年の堀割と見なされてきた故と思われる。3D地図を作成するための航空レーザ測量が実施された後、別荘地開発が行われたために、現在は環壕の西南側が失われている。備前屋敷とは複数の居館群であった。

#### 四 街道あつての居館、神社

追分は沓掛よりもさらに農業に縁の薄い土地である。天仁元年（一一〇八）は追分火砕流が当地を襲った年であるが、少なくともこれ以降しばらくは荒涼とした原野が広がっていたことは間違いない。一方で、地政学的に碓氷峠を越えるための重要な地であり、交通の盛んであったことも確かである。村落などの堅実な社会が絶無の土地であつてみれば、旅人や運送物品を狙う強盗、山賊などの不逞の輩が跳梁するのは当然の成り行きだったろう。追分は沓掛宿と同様、武力を背景に、また下諏訪神社の宗教的権威を借り

ながら交通管理を行い、この関連業務によって生計を立てていた宿に違いない。「備前屋敷」の主は、宿の有力者であつたろう。利権が碓氷峠に至る道にあつた以上、その壕をめぐらした居館が道と離れていたはずはない。そして宿は下諏訪神社を中心に形成されていたと見るのが常識的である。

追分火砕流は浅間山麓に多量の浅間石をもたらししたが、中世の道路網を検討するに際しては、この影響を考えざるを得ない。これまで、荒牧重雄や早川由起夫<sup>(34)</sup>による地質図によって浅間石の分布を知ることができたが、3D地図は、これをより正確に示している。追分火砕流区域を3D地図によって判読すると、火砕流が流れた痕跡を示す模様（以下、流理模様）が見える。逆にこの流理模様のある区域が浅間石の区域である。荒牧や早川による地質図によれば旧信越線の御代田駅付近に追分火砕流は及んでいない。これらは地表踏査によって得られた結論であつたが、3D地図によれば、少なくともこの御代田駅付近までは流理模様が断片的に残っている。これを根拠に現地を調査すると、それを示す露頭や浅間石の石垣などを確認できる。このあたりは開発が進んで浅間石の撤去が進み、一見浅間石のない地域に見えるが、かつては浅間石が累々としていたはずである。

岩村田方向から軽井沢高原に向かう場合、湯川右岸の交通路として、久保沢川左右岸の小田井宿や御代田駅が載る広大な台地と滝沢川の東の広戸や草越の各集落の載る台地の二つが考えられる。これらより東にも小さな台地があるが、湯川との間に断崖があり、交通路にはなり難い。御代田駅が載る広大な台地は前述のようにこれまで知られていたよりもさらに下方まで追分火砕流に襲われていたことが明らかとなった。近世に及んで中山道が通過したが、それまでは岩石をいりいりの歩行困難な地域だったはずである。



図5 追分火砕流から免れた草越道

一方、草越集落の載る台地は、その上端を除いて追分火砕流に覆われていない(図5)。しかも「草越」の「越す」は交通に係わる言葉であり「草越道」の伝承も残っている。追分の諏訪神社から見つかった奥書の最も古い年号は嘉応元年であるが、それは追分火砕流の六七年後である。追分周辺の大方は未だ追分火砕流によって荒れ果てており、草越道こそが交通可能であったろう。現代では、東信地方の幹線道路は、上越、長野、松本、諏訪などの諸市に向かう北国街道や中山道であるが、中世末期にあっては武田家の根拠地と結ぶ、千曲川沿いの佐久甲州街道こそが重要な道だったはずである。草越道は活況を呈していたに違いない。

### 三 終わりに

本論文と前論文において、浅間根腰の三宿が移動したとの伝承をめぐり、その事実関係を探り、移動の実在を確認することが出来た。合わせて移動前の集落がいずれも強く軍事に配慮された集落であることが明らかになった。そしてその「軍事」とは、大名などの支配階級相互の戦闘に関連するレベルと、近隣の他の村落との争乱あるいは交通管理に関連するレベルの双方があると思われる。軽井沢宿に先立つ中村の山、川、湿地を計算した立地は前者の例、同

じ中村の「山小屋」、追分の「備前屋敷」の壕などは後者の例と見なして良いであろう。沓掛の寶性寺は両者の中間型であろうか。軽井沢地方は戦略的要地であり、宿設置の政治性には高いものがある一方、境界地域特有の「無主」、「権力の空白地域」の要素もある特異な環境が、こうした軍事レベルの二重性をもたらしたのであろう。

近世の根越三宿の時代に至ると、軍事色が薄れ、俗権力と宗教権力の分離も感じられる。そして広域の交通のためのサービスマン拠点を前面に押し出した宿場の立地変更がなされていく。ただしそれは火災や河川流路の変更という契機が必要だったように見える。

本論文作成においては、国土交通省北陸地方整備局および長野県林務部が整備したDEMデータに基づき、長野県林務部が作成したCS立体図を使用させていただいた。これが古道や城館の探査に非常に有効であることを明らかにできたと考える。

寶性寺住職、川嶋光慈には資料のご提供をいただいた。各位にお礼を申しあげます。

註1 土屋長平、一九七六、「安永の沓掛大火」、『郷の華 第

二集』、二〇頁

2 岩井傳重、一九五四、『軽井沢町志』、軽井沢町、三四三頁



- 3 武部健一、二〇〇四、北海道―参勤交代現代道中記―
- 11 上信国境小諸宿、『道路』、二月号、通巻七五六、六七〇頁
- 4 岡村知彦、二〇〇六、「中山道一里塚と浅間根腰の古三宿(三)」「千曲」一二八号、一二頁
- 5 土屋長平、一九八五、「旧沓掛宿用水の怪」、『郷の華第六集』、一八七頁
- 6 前掲2、三四三頁
- 7 土屋長久、一九六二、「中山道沓掛宿長倉山多聞院寶性寺調査報告書」、代表 旧本陣、土屋栄一、『寶性寺の栞』所収、手書原稿、一九頁
- 8 江川良武、二〇一六、「長倉牧の軽井沢比定説について―3D地図などによる検証―」、『千曲』第一六〇号、東信史学会、五〇一〇頁
- 9 江川良武、二〇一六、「近世移行期における浅間根腰三宿の移動 その一 軽井沢宿―あわせて3D地図の有用性を検証する―」、『信濃』第六八巻一〇号
- 10 泉幾太郎、『町誌 軽井沢』、一三三頁、この文を泉は引用の形で記述している。土屋長久は軽井沢町の学芸員を長く務め、文書のありかを熟知しているはずであるが、中山道沓掛宿長倉山多聞院寶性寺調査報告書において泉の「引用」を彼の所説として引用している。泉は岩井の著作や未公開の古文書などによって自身で書いた文章と思われる。
- 11 前掲2、三六〇頁
- 12 土屋は弘化年間としているが、それ以前に掘地籍の側に

墓が集中し始めており錯誤と思われる。

- 13 橋口定志、一九九二、「方形館はいかに成立するのか」、『争点 日本の歴史4』、一三〇頁
- 14 藤木久志、一九八八、「村の隠物・預物」、網野ほか編『ことばの文化史 中世1』、平凡社、一五〇頁
- 15 笹本正治、一九八四、「戦国時代の山小屋」、『信濃』、七月号、四九九〜五一五頁
- 16 小林保夫、一九九二、「中世後期の交通」、児玉幸多編『日本交通史』、一一八頁
- 17 福島正義、「中世の交通」、児玉幸多編『日本交通史』、一五五頁
- 18 前掲2、三六〇頁
- 19 岡陽一郎、一九九五、「中世居館考」、五味文彦編『中世の空間を読む』、吉川弘文館
- 20 伊藤毅、二〇〇三、「[宿]の二類型」、『都市の空間史』、吉川弘文館
- 21 斎藤慎一、二〇一〇、「中世を道から読む」、講談社現代新書、一〇六頁
- 22 網野善彦、一九九二、「中世前期の交通」、児玉幸多編『日本交通史』、九七頁
- 23 奥野中彦、一九八六、「中世末交通の特質について」、『日本近世交通史論集』、交通史研究会、三三四頁
- 24 前掲2、三六〇頁
- 25 福島正義、一九九二、「中世の交通」、児玉幸多編『日本交通史』、一五六頁

26 久保田順一、二〇〇九、中世前期の地域社会、岩田書院、三七二頁

27 吉沢好兼、「四鄰譚叢 三」、『新編信濃史料叢書第八巻』所収、三三九頁信濃史料刊行会、一九七九

28 江川良武、二〇一二、「浅間山麓における融雪型火山泥流と追分宿の発展」、『千曲』第一五〇号、九、一一頁

29 前掲2、五三七頁

30 土屋長平、一九七九、「戦国時代の一様相 追分備前屋敷(館)跡」、『郷の華第四集』、四〇、四二頁

31 遠藤 丘、一九九六、「軽井沢追分原の中世城館址」、『千曲』、第九〇号、一、七頁

32 宮坂武男、二〇〇〇、『図解・山城探訪 第八集、佐久北部資料編』、長野日報社、七頁

## 雑誌関係要目(二)

伊那(二〇三九)

△口絵▽

立石寺・十一面観音立像

眼の人 井上正先生

井上正先生を偲ぶ

先生からいただいた宿題

を偲んで

雲の上の学院 — 追悼・井上正先生 —

織田 顕行

伊那史学会

織田 顕行

安藤 佳香

櫻井 弘人

井上正先生

織田 顕行

織田 顕行

織田 顕行

33 本論文作成中に、遠藤 丘氏より、氏が軽井沢町教育委員会に提出した未公表報告書「軽井沢追分原の中世城館址」をいただいた。それには追分原城としてこの環壕館が描かれているが、北側の道路は壕とは見なされてはいない。氏の公表論文と矛盾した主張があるように思われ、本文中に引用することは避けたせていただいた。

34 荒牧重雄、一九九三、『浅間山火山地質図、五万分之二』、地質調査所

35 早川由起夫、二〇一〇、『浅間山の噴火地図、五万分之二』、NPO法人あさま北軽スタイル

(元がわ・よしたけ 長野県軽井沢町長倉二六三―四二)

井上正館長の行基仏調査 立石寺・十一面観音像

井上家と兄・井上正のこと 清水 好子

井上正先生略年譜 思い出の講師(三)

ナイチンゲール記章受賞者 小林清子

長姫選抜大会優勝とテレビ放映 大原千和喜

最高齢の『伊那』購読者 関島桃子さん

を偲んで 鎌倉 貞男

今村 朝治

山崎延吉の農本思想の変容(二) — 合理主義者から精神主義者へ — 真板 道夫

斎藤 智志

法政大学史学会

法政史学(八二)

△論文▽

民間史蹟名勝保存事業とアカデミズム

— 京都府綴喜郡井手村・井手保勝会を事例として —

△研究ノート▽

齋藤 智志

山崎延吉の農本思想の変容(二) — 合理主義者から精神主義者へ — 真板 道夫